

「銀座・街のパワー」

明治五年二月二十六日、和田倉門内から出火した火が強風に乗って銀座方面を襲い、焼失町数四十一ヶ町、罹災者二万人という大災害となった。いわゆる銀座大火であり、これが時の明治政府をして銀座煉瓦街建設を決意させることになった。具体的には、まず道路幅の思い切った拡幅と歩車道分離、煉瓦敷き舗装、街路樹の採用、ガス街灯の導入などを行いつつ、銀座一丁目から八丁目にかけて煉瓦造り連屋式洋風建物を建築していった。その煉瓦家屋には焼け出された銀座住民が復帰することを優先したが、家屋の構造がなじめないこと、払い下げ価格が高額であったことなどから、多くの根生いの住民が銀座外に離散していったといわれる。しかし旧来の住民に替わって銀座には政府の高官、豪商たち、冒険的商人や新聞・雑誌社などが急速に集結し、先進的な繁華街を形成していった。

明治十五年発行の『銀座小誌』（関桎盆子著）には、「浅草の如き、上野の如き皆もとより繁華ならざるにあらず。しかれども、その繁華たるや往日江戸の光景と異なるなし。銀座八丁はしからず。独り文明開化の今日に到る所、その繁華たるいささかも江戸の旧様を帯びず、東京の新繁華というべきなり。」



連載・最終回

銀座に学ぶ 三枝 進

さへぐさすすむ (株)ギンザのサエグサ代表。1937年東京生まれ。慶應大学経済学部卒。大倉商事(株)勤務の後、(株)ギンザのサエグサ・副社長を経て現職。銀座文化史学会、銀座通連合会会員。

とあり、この時代すでに銀座が、洋風店舗が建ち並ぶ特異な個性とパワーをもった商業街を形成していたことがわかる。

次に銀座を襲ったのが大正十二年九月一日の関東大震災である。しかしこの時も銀座街の対応は機敏で、二ヶ月後の十一月十日を期して銀座通り商店一斉開店を申し合わせるなどをしている。また、自由奔放なデザインのバラック建築が次々と建てられて話題を呼んだ。

松坂屋銀座店、松屋、三越銀座店が続々開店して銀座デパート時代も幕開けしている。

さらに浅草～渋谷間の地下鉄全通、町名変更による「銀座八丁」の出現、カフェ・プランタンなどを中心とする文化的サロンの形成などがあり、モダンニズムの銀座＝銀ブラ全盛時代が到来する。

このように関東大震災から昭和十年頃までの銀座は新時代の活気にあふれた商店街として、すべての条件が好循環し、絶頂期を形成したといつてよい。今まで「銀座に学ぶ」で使わせていただいた写真家・福田勝治氏(故人)の銀座の写真もまた、戦時色の濃くなるまでの昭和十年から十五年までに撮影された、「よき時代」の銀座である。

ハイライフ研究 12号

© 財団法人ハイライフ研究所 2010 禁無断転載

発 行 2010年2月末日

発 行 所 財団法人ハイライフ研究所

〒104-0031 東京都中央区京橋

3丁目6番12号 正栄ビル5階

Tel. 03 - 3563 - 8686 (代表)

<http://www.hilife.or.jp>

発 行 人 中田安則

編 集 人 高津春樹

制作協力 エディティング・ブレイン

印 刷 株式会社シータス
